

## [45] フォーサイス『イザベラ・ダンス』パリ公演

### ～財政難、そして〈解体〉の先の新たな規範へ～

1998年8月10日 東京新聞 夕刊

パリのメトロに張り出された大きな広告に目  
とまったのは、四月にパリに来て、まださほど日  
がたっていないころだった。

黄色と黒の縞模様の蜂が、花に囲まれている。  
花も蜂も人間の扮装である。無邪気なようで変に  
毒々しい図柄。シャトレ座でのフランクフルト・  
バレエ公演、ウィリアム・フォーサイス演出振付  
のミュージカル・コメディ『イザベラ・ダンス』  
とある。

\* \* \*

フォーサイスといえば、現代バレエの最先端を  
行く超斬新な振付家。照明や音響に最新のテクノ  
ロジーを駆使し、振付そのものもコンピューター  
で構成したりする。「脱構築バレエ」などとも呼ば  
れて、理知と感覚の限界に挑戦しこそすれ、お楽  
しみのミュージカルからは最も遠い人だった。こ  
れは何かの企みにちがいないと疑ってかかるのが  
当然である。

ところがこの『イザベラ・ダンス』は正真正銘、  
娯楽向きのミュージカルだったのだ。耳の底に残  
っている昔懐かしい歌の断片とだじゃれの連続。  
客席は笑い通したが、途中で帰ってしまう人もい  
て、これは私のように生真面目にフォーサイスの  
「芸術」を見守ってきた人にちがいない。それに  
しても、あんなに沸きに沸いた舞台はこれまでフ

## [45] フォーサイス『イザベラ・ダンス』パリ公演

### ～財政難、そして〈解体〉の先の新たな規範へ～

1998年8月10日 東京新聞 夕刊

オーサイスの公演で見たことがない。

帰り道で一人の日本女性が「フォーサイスって面白いですねえ。わたしミュージカル初めてなんです」と話しかけてきた時には、返事に困った。

面白いのはいいが、舞踊の見地からすれば、特に見るべきものがあるわけではない。フランクフルト・バレエもミュージカル風に踊ればさすがにきれいだというだけ。いったいフォーサイスは何を考えているのだ。釈然としなかった。

\* \* \*

「フィガロ」紙で彼の長いインタビューを見たのはその直後のことである。

ここ八年間フォーサイスは定期的にシャトレ座で公演をして、いわば「住み付いて（仏語レジダン）」いたのだが、それも今回で打ち切りになる。新しいディレクターがレパートリーを替える必要があると考えたためだ。

フォーサイスは「シャトレ座は世界で最も美しい劇場の一つで、建物も舞台も大好き。離れるのは悲しいけれど、ディレクターの考えも分からないうではない。ぼくが彼の立場だったら、やっぱりそうしただろう」と言う。ちなみにシャトレ座は今世紀初頭、ディアギレフ率いるバレエ・リュックが最初のヨーロッパ公演を行って、二十世紀のバレエブームの発火点となった劇場である。

## [45] フォーサイス『イザベラ・ダンス』パリ公演

### ～財政難、そして〈解体〉の先の新たな規範へ～

1998年8月10日 東京新聞 夕刊

フォーサイスは本拠のフランクフルト・オペラ座でも財政面で問題を抱えていて、もしかすると芸術監督を辞めるか、あるいはダンサーを十人減らして二十五人にしなくてはならない。『イザベラ・ダンス』もまさに財政難から生まれた作品だったのだ。

八五年、オペラハウスの収入を増やすために、彼は『くるみ割り人形』かミュージカルかの選択を迫られた。「あれはぼくの『くるみ割り人形』なわけ」とフォーサイスは言う。日本でも『くるみ割り人形』の公演が多いのは客の入りがいいからだ。いずこも問題は同じである。

大向こうの受けを狙って、音楽のエヴァ・クロスマン<sup>II</sup>ヘクトとの共同演出で上演された『イザベラ・ダンス』だが、どうもフランス語版はうまくいかない、とフォーサイスは言う。元のドイツ語の台詞は、ほとんどが二重の意味を持つ懸詞<sup>かけこぼし</sup>で、翻訳不能なのだそう。それでもパリの観客は大喜びだった。

\* \* \*

今回のプログラムは三つあって、二つ目は『エイドス・テロス』、最後が「ミックス・プロ」。

『エイドス・テロス』は九六年に日本でも上演されたが、私はこの作品がエイドス（目に映る皮相の姿）とテロス（最終的に目指しているもの）

## [45] フォーサイス『イザベラ・ダンス』パリ公演

### ～財政難、そして〈解体〉の先の新たな規範へ～

1998年8月10日 東京新聞 夕刊

の二つを描いているのだということが、今回はじめて実感として分かったような気がした。

それはダンスそのものの基本的なありようでもあるのだ。つまり、いま目の前で上がっている手、着地する足は、形相としてただそれだけで訴えかけるものでもあるが、同時に裏で次の動きに精密なメカニズムで結びついている。現前と目的、その二つが問題なのだ。そうした動きの整合性を追求することで、フォーサイスは古典舞踊の規範を「解体」しつつ、次のレベルでの新たな規範に向かっていっていると書いてもいい。

「ミックス・プロ」では、時に無機質的、時に軟体動物みたいなフォーサイス振付を踊るにも表現力は重要だ、ということが見えて面白かった。始めは器械体操みたいだが（それでもラディカルな動きは刺激的だ）、しかし三つのプログラムで主演したダーナ・カスパーソンなどになると、動きの巧妙さに加えて表現に凄みがあり、有無を言わせぬ説得力である。

後半の舞台では観客の拍手も『イザベラ・ダンス』とは質の違う盛り上がりを見せた。そう、これこそフォーサイスだよと言わんばかりに。